

2026 ズバリ! 的中



古文

東京大学

本文箇所（冒頭～末尾）とテキストに掲載されている本文がズバリ的中

入試問題

前期日程

12・13ページ 第二問 本文

河合塾

大学受験科 完成シリーズ

①国公立大古文 第4講 A問題本文

②古文(共通テスト対応) 第14講 本文

第二問

次の文章は「狭衣物語」の一節である。狭衣大将(大将)と飛鳥井の女君は恋人同士だったが、その関係は秘されていた。以下は、飛鳥井の女君の一周忌の法要の場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

年の果てに、かの人の事せさせ給ひけり。心ざしのしるしには、何事をかはと思せば、経、仏の御飾りを、なべてならずせさせ給ふ。何事も、まことに日の中に仏にも成るばかりに、思し掟たり。その日、いたう忍びて、自らおはしぬ。講師は、山の座主なりけり。請僧六十人、七僧なども、並び居たり。

いみじう尊きにつけても、「めでたかりける人かな。この御心にかくまで思されけるよと、見る人多かり。さしもすぐれ給へる御さまに、泣く泣く読み給へる。願文の悲しさは、袖濡らさぬ人もありがたげなるを、まいて大将の御直衣の袖は絞るばかりにもなりぬべし。さるは、「人目も心弱くや」と思し恐はぬにはあらねど、ただうち聞く集、物語、古歌なども、我が思ふ筋なるは、こよなう目留まりて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。見たてまつる人なども、「誰ならん、いとかはかり思されたりけるは、けに口惜しかりける命のほどかな」と、見おどるかぬはなし。さまざま尊き事どもは多かれど、えまねはぬは、なかなかかひなし。

事果てて、僧も人々もまかでぬれど、自らは留まり給ひて、尼君に会ひ給ひて、尽きせぬあはれと思したり。入相の鐘の音ほかに聞こえたる、夕べの空のけしき、所がら、言ひ知らず心細げなるを、籠かき上げて、つくづくと眺め給ひて、行ひ給へるけしき、いみじう尊くあはれげなり。

晚にもなりぬらんとおぼゆるまで居明かし給ひて、あまり苦しければ、やがて端にうち休みて、まどろみ給へるに、ただありしさまにて、かたはらに居て、かく言ふ。

※同内容のため「古文(共通テスト対応)」より抜粋

次の文章は、「狭衣物語」の一節である。狭衣大将は、かつて愛した女君が、自分の前から失踪して、子を産んだ後、病没していたことを知る。本文は、大将が女君を偲び、女君の生前の住まいである常磐で一周忌の法要を営む場面から始まる。これを読んで、後の問い(問1～5)に答えよ。(配点 45)

年の果てには、かの常磐のこと、せさせ給ひけり。「心ざしのしるしには、何事をかは」と、経、仏の御様をも、なべてならずせさせ給ふ。何事も、「日の中に仏にもなるばかり」と、思し掟たり。その日いたうしのびておはしぬ。講師は山の座主なりけり。請僧六十人、七僧なども並び居たり。いみじう尊きにつけても、「めでたかりける人かな。この御心、かくまで思されけるよ」と見る人多かり。さばかり優れ給へる御様に、泣く泣く読み給へる願文の悲しさを、袖濡らさぬ人もなかりけるを、まいて、大将殿の御直衣の袖は、ただ絞るばかりになりぬ。さるは、「人目も心弱くてや」と思し恐はぬにはあらねど、ただうち聞く物語、古歌などさへ、わが思ふ筋なるは、こよなく目とどまりて、あはれにおぼゆるわざなればなるべし。見奉る人も、「いとかくばかり、この人に思されたりけるは、口惜しかりける命のほどかな」と、見おどるかぬはなし。さまざま尊きことども多かれど、えまねばす。

こと果てて、僧も人々もまかり出でぬれど、みづからは留まり給ひて、尼君に会ひて、姫君の御有様など語り給ひて、「尽きせぬあはれなり」と思したり。入相の鐘の音、ほかに聞こえたり。夕べの空の気色、所がら言ひ知らず心細げなるを、籠かき上げて、つくづくとながめ給ひて、行ひ給へるけしき、いみじう尊くあはれげなり。

暁にもなりぬらんとおほゆるまでに、やがて端にうち休みてまどろみ給へるに、ただありし様にて、かたはらに居て、

暗きより暗きにまどろみ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふ様の、^(ウ)らうたげさもめづらしくて、「もの言はん」と思すに、ふと目覚めて見上げ給へれば、澄みのほりて、月のみぞ顔に映りたりける。雲の果てまで澄みわたりたる空の気色を、ただの寢覚めだに心細かりぬべきを、かたはらにまだある心地して、見渡され給へど、人はみな遠く退きつつ、いとよく寝たり。ひとりつくづくと空を眺めて、泣く泣く越ゆらん死出の山路まで思しやる。ただ、かの「吉野の山」をも、後らかさんことをも、恨めしげに思ひたりし気色など、何となくなつかしき様なりしも、ただ今差し向かひたるやうに思ひ出でられ給ひて、

おくれじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらん

と思しやるも、枕は浮きぬべき心地し給ひて、経を読み給ふ。

暗きより暗きに惑ふ死出の山とふにぞかかる光をも見る

と言ふさまの、らうたげさもめづらしうて、「物言はん」と思すに、ふと目覚めて見上げ給へれば、澄み上りて、月のみぞ顔に映りたりける。雲の果てまで、さやかに澄みわたりたる空のけしきを、ただの寢覚めにだに、心細かりぬべき空のけしきなれば、かたはらにまだある心地して、見わたさるれど、人は皆遠く退きつついとよく寝たり。

一人つくづくと空を眺め給ひて、泣く泣く越ゆらん死出の山路まで思しやるるに、ただ、かの吉野の山をも後らかさんことを、恨めしげに思ひたりしけしきなど、なつかしかりしも、ただ今向かひたるやうに思ひ出でられ給ひて、

後れじと契りしものを死出の山三瀬川にや待ちわたるらん

と思しやるも、枕浮き給ひぬべき心地し給ひて、経を読み給ふ。